

# 乙貞

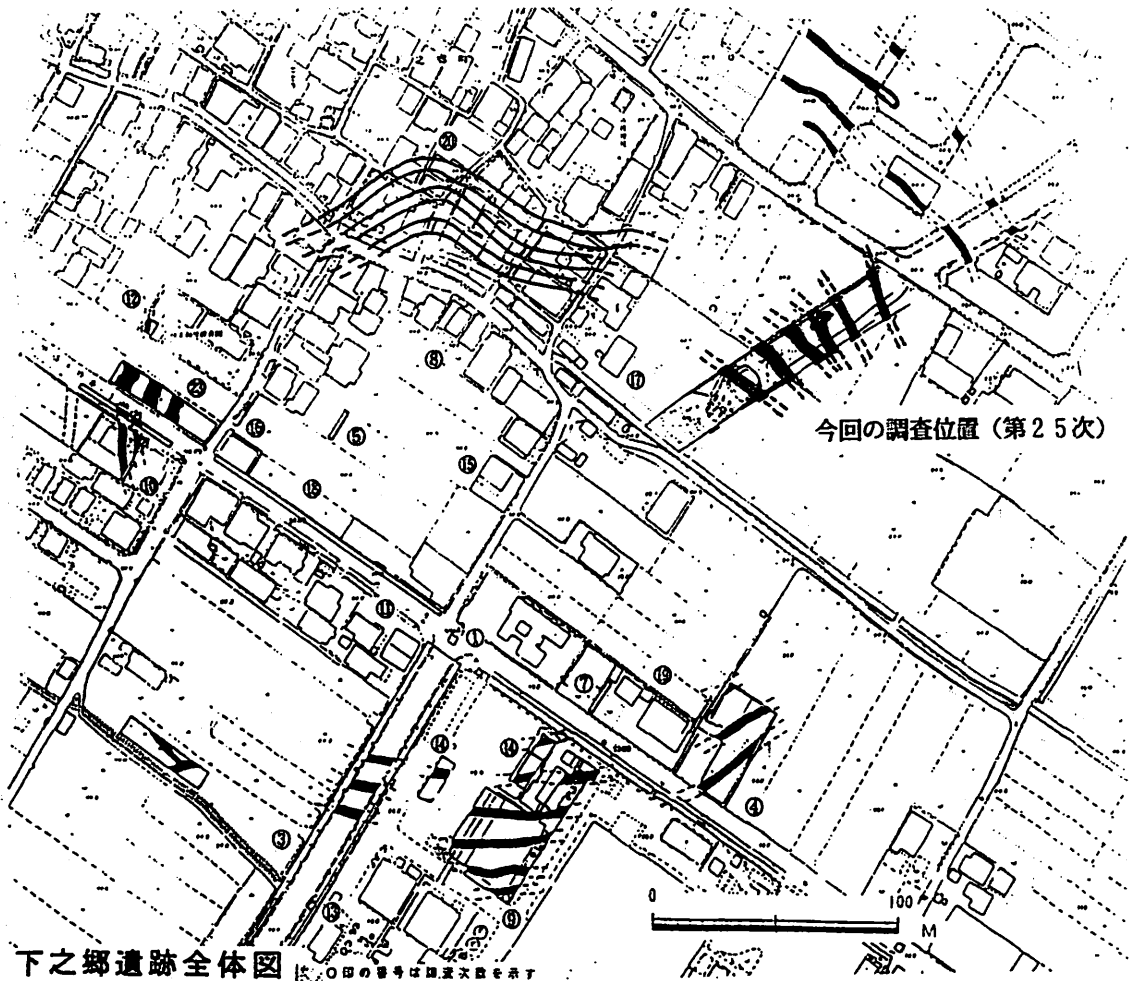
第96号 通巻17巻第5号  
1997年1月31日 発行

守山市立埋蔵文化財センター  
☎077-585-4397

☎524-0212  
守山市服部町2250番地

## ☆多重環壕？下之郷遺跡

昨年10月より調査を進めていた下之郷遺跡で環壕と呼ばれる大きな溝跡が6条発見されました。これらの環壕は幅5m～7m程で、深さは1.5m前後のもので、埋もれた土の中から弥生時代中期後半（約2000年～2100年程前）の土器や石器、木製品が出土しました。今回発見された環壕は集落の北東端にあたるものです。さらにこの外側でも、過去の調査で3本の壕が確認されていることから、都合9条の壕が集落の北東側に掘られていることとなります。この結果、集落の規模は、環壕の外周部分で長径420m、短径370m以上にも及ぶ全国でも屈指の環壕集落であることがわかりました。

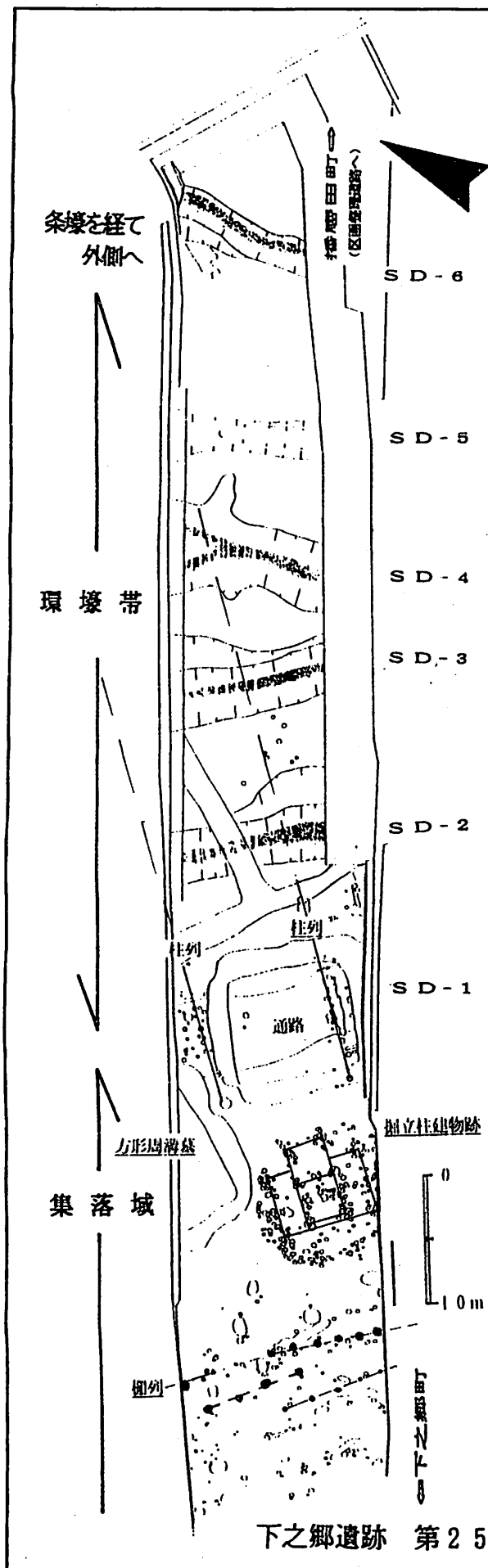


「乙貞」は服部遺跡の調査で出土した銅印に刻まれていた文字で、奈良時代末頃のものと思われる。大きさは約3.3cm × 3.3cm，高さ約4.2cm，重さ約75gです。この銅印は公印として使用されたものではなく、個人印として使用されたものと考えられます。



## ☆下之郷遺跡の調査

調査をはじめて早くも4ヶ月が経ちますが、現在までにムラを<sup>ぼうぎょ</sup>防御するために掘られていたと思われる環壕が6条と出入口にあたると思われる<sup>ちゅうれつ</sup>柱列、ムラのなかでは<sup>ほったてはしらたても</sup> <sup>さくれつ</sup>掘立柱建物、柵列（いずれも弥生時代中期後半）、そして古墳時代前期に築かれた<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>方形周溝墓2基、近世以降の用水路などが見つっています。見つかった6条の環壕のうち内側の4本は幅が6m以上もあり、外側の2条はそれよりやや幅の狭いものです。いずれも深さが1.5m程あり、一足飛びにはできない規模をもっています。これらの壕は全て同時期に掘られたものかどうか今後慎重な検討が必要ですが、壕が全て同時にうもれたかという、若干の違いがありそうです。内側の壕は、外側の壕よりもいち早く埋め戻され、その上には柱列を2条並べて、その間を通路とし、集落への出入口としていたようです。そして、その出入口のすぐ内側で建物跡が発見されました。建物は2間×1間の高床の建物に、平面形式の違う建物が重なる状態で検出されました。この建物を一体化した複雑な構造をもつ建物と理解すれば、今までの弥生時代の環壕集落では見つかったことのない特異な型式の建物といえます。また、この建物には背後（ムラ側）に、建物を囲うように柱穴が並んでいて、<sup>へい</sup>塀のような施設があったと推定されます。そして、この建物の背後約6mには、環壕と同じ方向で柵列が並んでいることが判明しました。現在のところ、建物跡の掘削調査はしていないので、建物の高さがどのくらいになるのか、またどのような立体構造をもつものかなど、今後の重要な調査課題です。柱列で囲まれ、出入口の正面に据え建てられた高床の建物、それは環壕集落の外側から眺めたとき、どのような物として受け止められたのでしょうか。（川畑）



下之郷遺跡 第25次調査地

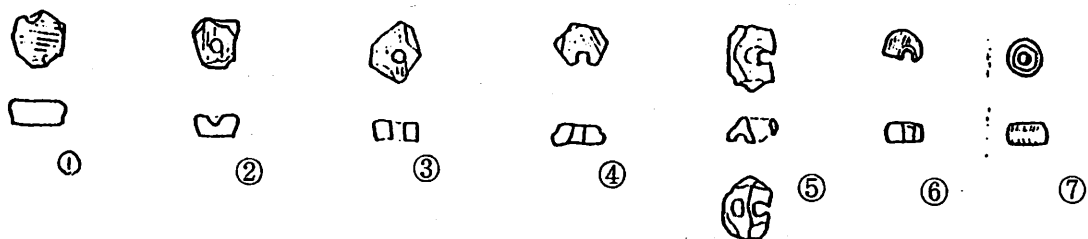
～整理室から～

埋蔵文化財センターでは、<sup>いせきはくつ</sup>遺跡発掘調査で出土した土器や木器といった遺物や<sup>じゅうきょし</sup>住居址や溝といった遺構の図面を整理して皆さんにいつでも見ていただけるような状態に仕上げるとともに、遺跡のあらましをまとめた報告書を作成しています。昨年しゅうの夏に調査が行われた<sup>よしんぎた</sup>吉身北遺跡（第16次調査）の整理が一段落ついたので、ここでその一部を報告します。

吉身北遺跡は今から1400年程前の古墳時代後半の集落遺跡です。第16次調査では8棟の住居址が見つかり、そのうちの1棟が滑石という柔らかい石を使って、<sup>うすたま</sup>白玉（ビーズ）を製作していた<sup>こうぼう</sup>工房（玉作り工房といひます）であったことがわかりました。この玉作り工房からはこぶし大の<sup>げんせき</sup>原石から、原石を加工した際の細い<sup>はへん</sup>破片や削りかす、<sup>みせいひん</sup>白玉製作途中の未製品や失敗品、完成品などが約2kg出土しました。これらの中から直径8ミリ前後のおはじきのような形をしたもの（下の図①）。穴を開けかけた途中のもの（図②）。穴が開いたもの（図③）。穴が開いてはいるが、<sup>こわ</sup>壊れてしまっているもの（図④）。穴を両面から開けてずれてしまったもの（図⑤）。側面、上下両面は整えられているが、壊れてしまったもの（図⑥）。完成品と思われるもの（図⑦）が見つかりました。このことから白玉は原石を細かく割って直径8ミリ前後の円板をつくりだし、穴を開け側面、上下両面を<sup>うが</sup>磨いて完成することがわかりました。また、穴は片方から開けるものと両側から開けるものがあること、滑石は柔らかいため、製作の途中で壊れてしまうものが多いこともわかりました。またこの玉作り工房からは穴を開ける道具と考えられる鉄製の<sup>くぎ</sup>釘状の工具も出土しました。吉身北遺跡は今までの調査からも滑石製の白玉や細い破片や削りかすが出土していることから玉作り工房の存在が推測されていましたが、今回の整理でそれが確定したことは大きな成果であったと思います。また白玉の製作の流れや、<sup>せいざくぎじゆつ</sup>製作技術がつかめたことは古墳時代の<sup>しゅこうぎやうせいさん</sup>手工業生産を考える上で参考になることであろうと思います。

このように発掘調査後の整理の過程における新たな発見は、遺跡を違った<sup>しやん</sup>視点で捉えるきっかけにもなります。

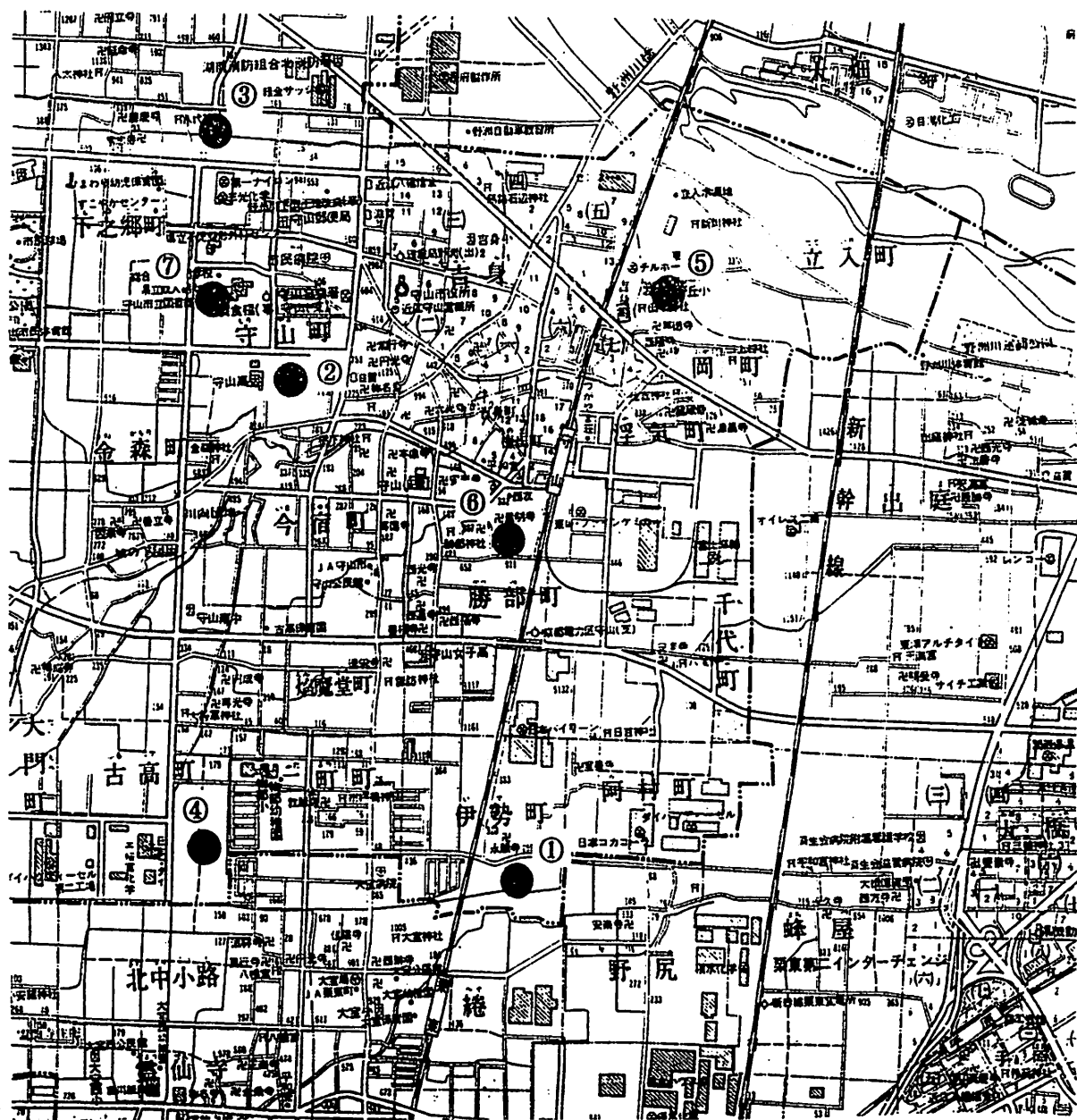
これからも整理で「新たな発見」があった時には皆さんにお知らせします。 (大岡)



吉身北遺跡出土滑石製品・未製品・失敗品

§ 発掘調査だより §

No.	遺跡名 (調査回数)	調査地	調査期間	調査面積	担当者
①	伊勢遺跡 (第45次)	守山市伊勢町字伊勢里	H9 11/26~12/26	約400㎡	伴野
②	金森東遺跡 (第12次)	守山市岡町字小野町・字太田・字大輝	H8 10/22~(継続)	約8000㎡	小出
③	下之郷遺跡 (第25次)	守山市下之郷町字見田	H9 9/29~(継続)	約2300㎡	川畑
④	塚之越遺跡 (第13次)	守山市古高町字水押	H9 4/23~(継続)	約6500㎡	畑本
⑤	吉身海道遺跡 (第3次)	守山市立入町字仁名寺	H9 11/25~H10 1/17	約480㎡	中村
⑥	吉身北遺跡 (第17次)	守山市勝部町字松塚	H9 8/18~12/26	約1600㎡	佐々木
⑦	吉身西遺跡 (第85次)	守山市守山町字下目田	H9 7/23~H10 1/16	約300㎡	藤原



### ①伊勢遺跡の調査

伊勢町において、個人専用住宅の建築に伴い発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代の溝1条（溝1）、室町時代の掘立柱建物、井戸（井戸1・2）、溝（溝2・3）などを検出しました。溝1は東西方向にのびる溝で、幅3m以上、深さ50cmを測ります。砂と礫によって埋まっています。自然流路とみられます。溝内からは弥生時代後期の土器が出土しています。

掘立柱建物1は3間以上×2間以上の建物で、大規模な建物とみられます。柱には平らな石が置かれていて、柱が沈まないように設置したのでしょう。この建物に平行して溝2・3がのびています。特に溝3は幅約3m、深さ70cmと大きく、屋敷地の周りに掘られた大溝と考えられます。溝2はさらにその中を区画したやや規模の小さな溝と見られます。井戸1・2は、このような屋敷地の内部に掘られた井戸と考えられます。

この周辺部の調査でも、14～15世紀にかけての溝や建物が広がっていて、区画溝をともなう屋敷地がいくつか連結して1つの集落を形作っていたと想像されます。（伴野）

### ②金森東遺跡（第12次調査）

現在、道路敷設部分の調査はほぼ終了しており、1月末の航空写真撮影も終了しました。

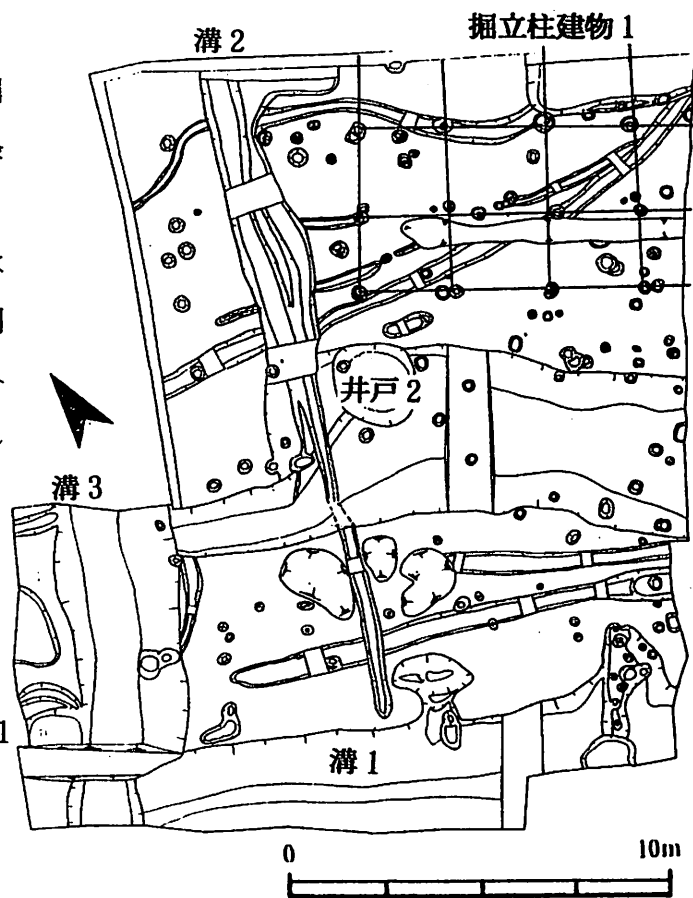
今回の調査では、東側から西側に向かって調査を行っていますが、次第に発見される竪穴住居の数が増えていることから、現在の調査区が、当時の集落の中心に近いところと思われます。竪穴住居の時期も、弥生時代後期から古墳時代中期のものが確認されており、およそ400年もの間に、人々の生活がどのように変わっていったのか、大変注目されます。詳しいことは追って報告します。（小出）

### ③下之郷遺跡（第25次調査）

詳しくは1・2ページをご覧ください。

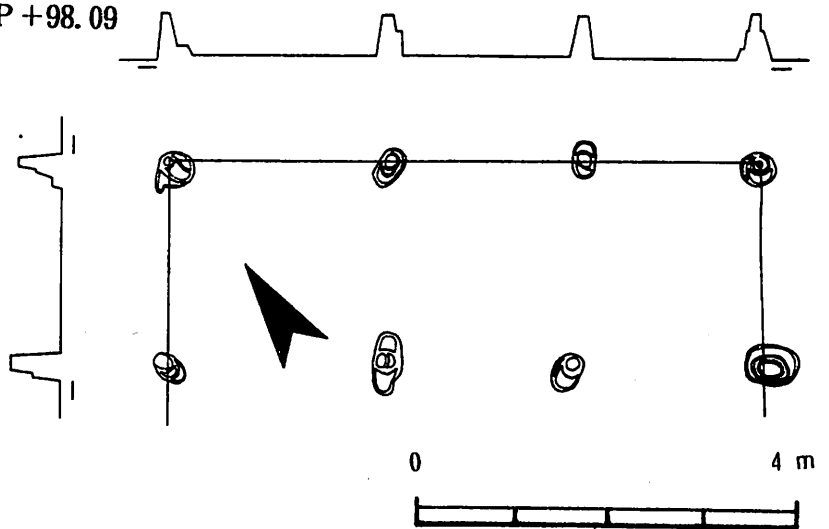
### ④塚之越遺跡（第13次調査）

前号で一部お伝えしましたとおり5つ目のトレンチの下層は、結局南北方向に走る河道状の落ち込み、その下から同じような土で埋まった溝3条と土壌やピットを検出しました。それから出土した遺物から



古墳時代前期であるとわかりました。TP+98.09

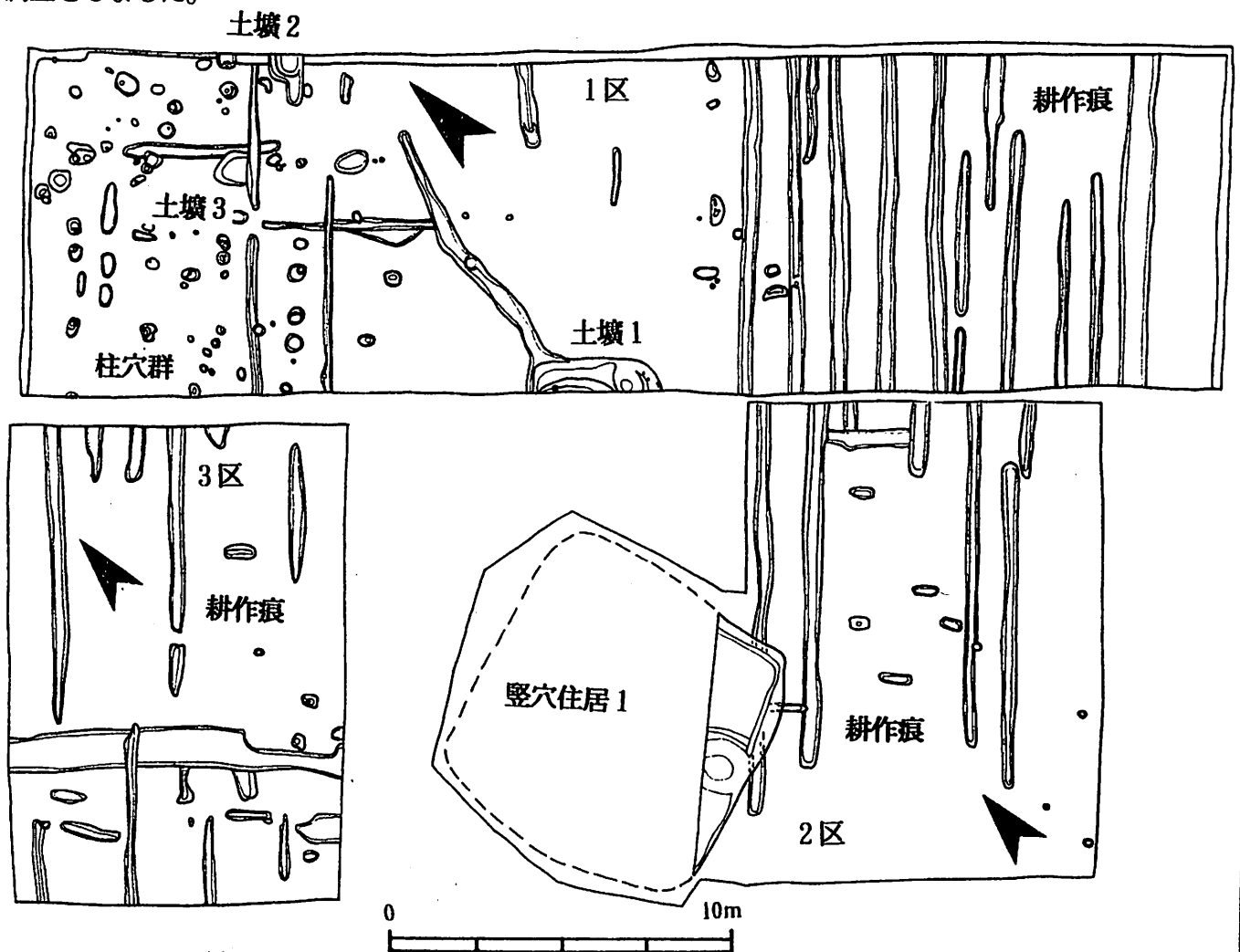
現在、最後のトレンチで調査を実施しており、5トレンチから続く落ち込みを検出しています。調査区の西端からは掘立柱建物（2間×2間以上）を1棟検出しましたが調査区外へと広がります。羽釜はがまや土師器はじきざら皿が出土しており、13世紀後半の時期と考えられます。



(畑本)

⑤吉身海道遺跡（第3次調査）

11月25日～1月14日まで立入町で発掘調査を行いました。3つの調査区（1区、2区、3区）を設け調査をしました。



1区の西側から鎌倉時代後期の柱穴と土壇（1～3）と東側から中世以降の耕作痕を検出しました。2区からは古墳時代前期の竪穴住居と中世以降の耕作痕を検出しました。竪穴住居の大きさは8.4 ×

8.4mで、深さ約60cmを測ります。床面からは壁に沿って溝が巡っており、また大きな土壌があります。その土壌の周りにも溝があり、間仕切り溝であると考えられます。土壌の中から土師器や土玉が出土しました。

3区からは中世以降の耕作痕を検出しました。

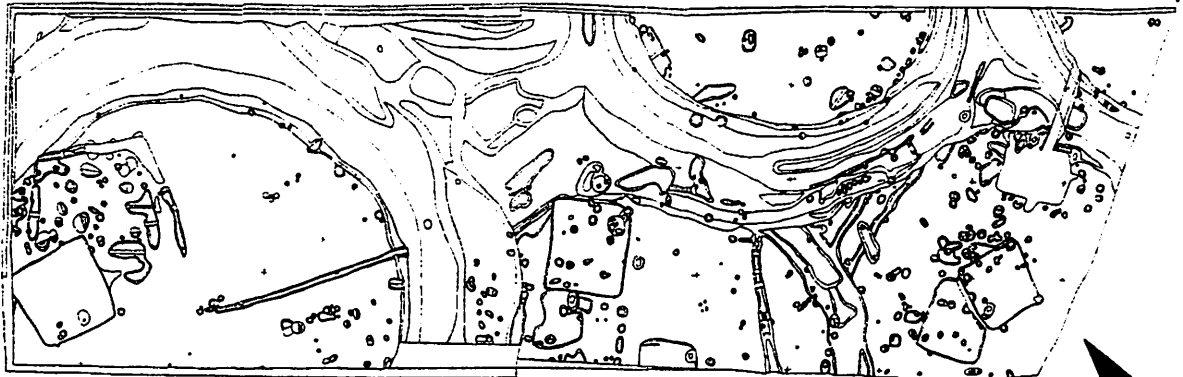
立入小学校や幼稚園では古墳時代前期の竪穴住居と鎌倉時代後期の屋敷跡がみつかっています。

今回の調査と以前の調査から、古墳時代前期に集落が営まれ始めましたが、その後ムラが途絶え、そして鎌倉時代後期に入ると屋敷が造られ、集落が営まれたと考えられます。しかしその後、その集落も衰退して畑や田んぼとして利用され、現在に至るものと思われます。(中村)

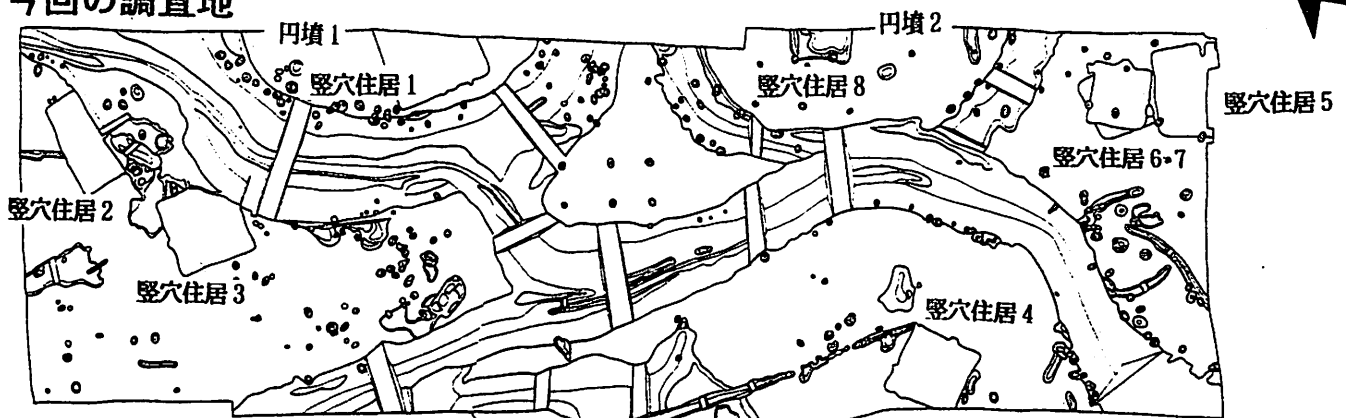
### ⑥吉身北遺跡 (17次調査)

今回の調査区内では竪穴住居1が3回の建て替えをもち、その分を含めて10棟の竪穴住居が見つかりました。昨年度の調査では、5棟見つかっています。時期はすべて5世紀の中頃から後半までの間です。その後、円墳が、以前ここで暮らしていたであろう人々の住居を壊して、4基築造されます。従って、この地が集落から墓地へと変わったことがわかります。時期は出土した土器からすべて6世紀初め頃ではないかと思われます。造られた順としては、円墳2の形が円墳1によって削られきれいな円を描いていないことから一番古いと考えられます。また中央を流れる大きな溝は円墳1の周溝の一部を利用して流れており、溝の底から50cmくらいの高さの所には、直径5~10cm程の柱穴が無数に見つかりました。これは護岸堤を造った跡と考えられます。昨年度の調査と今回の調査を合わせて考えると、当時の人々の交流、集落から墓地への変遷、そして土木技術など様々なことがわかります。(佐々木)

昨年の  
調査地

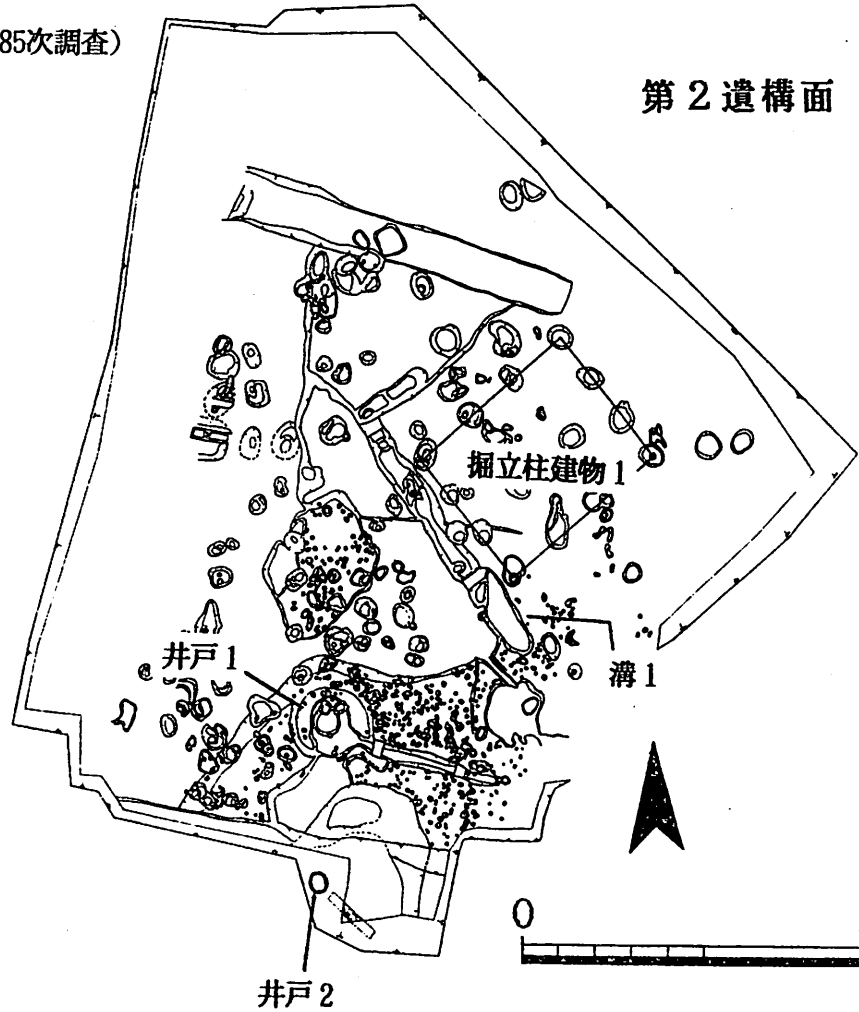


今回の調査地

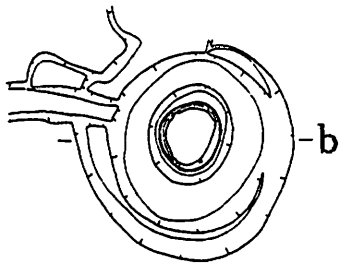


よし だし  
⑦吉身西遺跡 (第85次調査)

第2遺構面



井戸1平面図



井戸1断面図



(今回の調査地)



第4次調査

第60次調査



井戸2断面図





今回の調査区は60次と74次調査区の間にあたります。60次調査では、縄文時代晩期から平安時代末にかけて流れていた旧河道や弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土壌、古墳時代後期の集落、幅25m、深さ2mの東から西へ流れていた旧河道が見つかりました。この旧河道は埋まっていく過程で水田として利用されていて、古墳時代後期の畦などがみつかりました。また74次調査では、弥生時代～古墳時代後期のムラと7世紀の集落が見つかり、古墳時代後期のムラでは滑石を用いた装身具づくりが行われていた可能性があります。

今回の調査区では、遺構面が2面あり、1面目では溝と柱穴が見つかりました。溝は南北方向に流れていて、幅2.3m～2.9m、深さ約50cmで、古墳時代後期から近代にかけての土器が埋まっています。

2面目では、柱穴、溝1、井戸(1、2)、掘立柱建物1などが見つかりました。溝1は幅70cm、深さ30cmで、北から南へ流れていたと考えられます。この溝1に平行するように掘立柱建物1(3間×3間)が見つかり、ともに時期は不明です。次に井戸1の規模は直径約2.5m、深さ1mで中央には井戸枠が残っていました。井戸1のまわりには小さな柱穴が並んでおり、覆屋があった可能性があります。井戸枠はスギの丸太を削り抜いて作っていて、最初は桶として使っていたものを井戸枠に転用したようです。この桶は、内側の下の方が厚くなっていて、ほぞ穴が2カ所あいていて、北陸の遺跡でよく見られる形の桶です。また、この井戸1は溝とつながっていて、60次調査で見つかった旧河道へ水を流す役目をしていた可能性があります。井戸2は、井戸1と同様削り抜きの桶を井戸枠に転用して、落ち込みの中に倒れないようにするために板や棒のようなもので固定した状態で、地面に据えられていた可能性があります。また、井戸枠の下には幅15cm、長さ約2mの板があり、井戸枠とどのような関わりがあるのか、これから考えていかなければなりません。

(藤原)

### 講演会 ご案内

日時 平成10年3月7日(土) 13時30分

場所 市立図書館 視聴覚室(2階)

演題 『物と人の交流』

—古墳時代の生産と運搬—

講師 県立安土城考古博物館

学芸課 主任 吉田 秀則 氏

主催 埋蔵文化財センター友の会

古墳時代後期の交通手段や運搬手段、流通した物資などについて講演して頂きます。会員以外の方も参加できますので、お誘い合わせのうえ多数ご参加下さい。

守山市立埋蔵文化財センター

### 友の会 会員募集

埋蔵文化財センター友の会は、歴史や埋蔵文化財に興味を持つ人々の集まりです。文化財に親しみ、郷土の歴史について理解を深めるために見学や講演会などの活動を行っています。また、市内の遺跡発掘の状況がわかる機関誌「乙貞(おとぎ)」をお届けします。

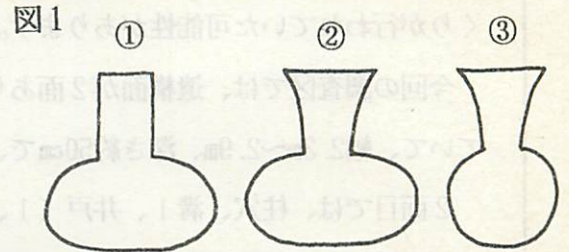
会費 2000円(年間) 4月末日までに同センターへ直接又は郵便局から口座番号 01020-6-54517 加入者名 埋蔵文化財センター友の会へ振込んで下さい。

問い合わせは、同センター ☎ 077-585-4397 へ

## ☆「モノ」の移り変わりと年代の決定

前々回は「掘れる土、掘れない土」で、どのようにして土が埋まりそれを発掘調査によって見つけるかについて述べました。また前回は「モノの移り変わり」について、いつ描かれたか年代のわかるミッキーマウスを例にあげて、「モノ」が持つ特徴から新しいモノ、古いモノが決定できることを示しました。では、年代の全くわからない遺跡ではどうでしょうか。簡単な例として土器で見てみましょう。

図1のような3点の壺が同じ遺構から見つかりました。これを前回の「モノ」の移り変わりの考え方を当てはめて古いモノから新しいモノへ並べてみましょう。①～③までは壺です。①と②は体の部分が同じ形をしています。しかし、口の部分は①がまっすぐのびていて、②がラッパ状に開いているという違いがわかります。では②と③を比べてみましょう。③の口の部分は②と同じです。しかし、体の部分は丸くなり②とは違います。それでは、全体を整理してみましょう。①と②は体の部分で同じ関係にあり、②と③は口の部分で同じ関係にあり、②が両方に共通する特徴(要素)を持っていることから3つのうちの真ん中に位置づけられます。このことから考えると、答えとして形の似ている順にならねば①→②→③か③→②→①の順でどちらの考え方も出来ます。では①・③はどちらが古いのでしょうか。



それでは前々回の「掘れる土、掘れない土」の応用編として考えてみましょう。遺跡を発掘するときには、上の層から一層ずつ掘っていきます。それは、低いところにある場所では高いところから雨などによって土砂が流されてきて徐々に溜まっています。従って、下に溜まっている層は上に溜まっている層よりも古いという考え方が成り立ちます。

この考え方をもって先ほどの土器の順番について考えてみましょう。ある地点を発掘すると図2の様

に土が溜まっていて、土器がそれぞれの層の中に入っていました。

下の層は上の層よりも古いという考え方がありますから、図1の土器の古い順は③→②→①となります。このことから言えることは、モノの移り変わりだけではモノの新しい古いという順番は決めることはなかなかできないということです。

私たちは、発掘調査をしていて土器などの遺物を見ながら、「これは古墳時代前期のものである」とかよく言っていますが、それは「モノの移り変わり」そして「土のたまり方」、この両方を考え合わせてはじめて、時期の決定をしています。そして、その考え方にもとづいて、土器などの遺物、そして土の層を見て、時期を決めているのです。

(佐々木)

